

# 大学生の友人関係は変化するか？ ——大学4年間の追跡的検討による大学適応感との関連について——

渡 辺 舞

## 大学生の友人関係は変化するか？

——大学4年間の追跡的検討による大学適応感との関連について——

### Do the College Students Change Their Friendships?: A Longitudinal Study through Four Years in Association to Adjustment of Students in University

渡 辺 舞

#### 【問題】

##### (1) 複数で構成される青年期の友人関係

人は生まれたときから、さまざまな対人関係の中で、生活をしている。青年期では、それまでの児童期と比べ、家庭と徐々に距離を置き、親から心理的に独立し、社会や文化の影響をより能動的に受ける時期であり（宮下,1995）、青年にとって特に重要な対人関係は友人関係と恋愛関係である（多川・吉田,2002）。友人関係と恋愛関係はともに任意であり自発的な選択の中で関係の構築および関係の継続がなされるが、友人関係の特徴の一つは恋愛関係とは違い関係を拡充可能なことである（遠矢,1996）。すなわち、青年期の友人関係が複数の対人関係で構成されることが予測されるため、友人関係研究では、最も親しい友人との1対1の関係性にとどまらず、サークル内の友人関係やクラス（ゼミ・学部学科）の友人関係といった集団としての友人関係にも注目する視点が求められる。松田（2000）によると友人関係は複数であるが故に、状況に応じて友人を選択することが可能となることを指摘し、現代青年の新しい友人関係のあり方であると考察している。神山・清水（2005）は、友人イメージ法という投影

法によって大学生の友人に対するイメージを捉える検討を行った。この手法では、最大5名の友人を想起することが協力者に求められるが、5人を想定したものが約5割であり、1人を想定した協力者は、141名中1名のみであった。内藤（2007）は同性の親友と同性の友人数をそれぞれ回答させているが、その結果、同性の親友の人数は平均で4.04人であり、同性の友人の人数は平均で40.45人であった。渡辺（2007）も、大学1年生の調査協力者に同性の友人数を回答させたが、男性では45.14人、女性では54.27人の友人が存在すると回答している。友人関係は複数関係で構成されるが故に、研究対象をどのように定義づけするかが重要な視点となり、また親密さのレベルによってその意味づけが異なることが指摘されている（和田,1993；吉岡,2001）。複数友人関係を研究対象とすることは、データ収集の煩雑さから検討されることが少ないが、複数の友人関係を捉え、形成過程を抽出する視点が望まれる。

##### (2) 友人関係における親密化過程の先行研究とその研究方法

親密化過程（close relationship process）とは、人と人が出会い互いに親しくなる過

程である(松井,2005)。親密化過程に関する友人関係研究のうち、二者が知り合い親密化していく様相がその関係の初期に決定するとされる「関係性の初期分化現象(early differentiation of relatedness; Berg & Clark, 1986)」に注目した研究がある。この理論では親密な関係と表面的な関係の分化を関係の初期段階から二者を追跡するという縦断的研究(Berg, 1984; Hays, 1984,1985; 中村,1989; 山中,1994)によってその過程を明らかにしてきた。例えばBerg (1984)は大学新入生の同性ルームメイトとの関係において、出会って2週間時点での関係の満足度が6カ月後の満足度や親密さを予測できることを、また中村(1989)は知り会って1ヶ月後の相手との相互作用の頻度が5ヶ月後の相手との親密さを判別することを明らかにしている。さらに山中(1994)は、友人との出会いから1週間後のごく初期段階に注目し、出会いから2週間目には、関係の初期分化が生じていることを明らかにしてきた。これらの研究では関係形成初期の友人関係のあり方がのちのちの关系到影響を与え、親しい友人関係形成に寄与することを示すものである。関係の初期段階で出会った友人が表面的な関係である場合に注目すると、単一の時点の研究にせよ縦断的研究にせよ二者関係のみに注目するこれらの研究では、初期の友人とは別に新たに築かれる友人関係の様相が明らかにされないことになる。前述のとおり、友人関係は二者関係を維持するだけでなく、複数の友人関係の中で友人が選択される過程でもあることから、最も親しい友人が変化する可能性もあり、友人関係の形成初期段階以降においても友人選択の推移を明らかにする視点が求められる。この点に関わって渡辺・今川(2011)<sup>1)</sup>は3回の追跡的調査期間中、最も親しい友人について質問紙調査を行ったが、調査ごとに協力者に最も親しい友人を選択してもらった。その結果、3回の調査期間中一度も友

人を変更しなかった調査協力者は44.4%であり、この群では、少なくとも入学3週間目の最も親しい友人選択が3ヶ月後まで続き、山中(1994)らの指摘した関係の初期分化が生じた可能性を示唆することを確認している。一方で、初期の友人よりもより親しいと認知される友人が出現した調査協力者が55.6%いるということも確認した。渡辺・今川(2011)の研究では、大学入学後数ヶ月間の追跡にとどまっておき、大学生生活の初期段階の最も親しい友人関係を追跡したに過ぎないため、大学生生活全般の友人関係を長期的に追跡する視点も重要であると考ええる。なお渡辺・今川(2011)は、調査時点間で同じ友人を選択することまたは友人を変更することを「友人選択状況」と定義している。本研究でもこの定義を採用し、以下で使用していく。

### (3) 大学進学時の友人関係の特徴と大学適応感に関する先行研究

南・山口(1992)によると青年にとって大学進学時には、大学生活という新しい環境に適応しつつ、対人関係においても大きな質的な変化や移行期を迎えることを指摘している。また小嶋(1998)は中学・高校への進学とは違い、高校から大学への進学については、「新しい学生生活への移行」ばかりでなく、大学生活でもさまざまな出会い・経験・カリキュラムを通しての「新しい価値観への移行」、また卒業を控え就職・進学への「社会人への移行」へと環境的枠組みのなかでさまざまな選択が強いられることを指摘している。この点に関連して、大学生の適応過程を検討するためには、大学生活の初期の様相にとどまらず、4年間における過程を縦断的に検討する必要性が指摘されていることから(安藤・廣岡・小川・坂本・吉田,2001; 植村・小川・吉田,2001; 吉田・橋本・安藤・植村,1999; 奥田・川上・坂田・佐久田,2010)、大学4年間という大学生活全般への適応感を検討する

必要がある。

大学進学時の対人関係と適応感についてはさまざまな研究がある。南・山口（1992）は大学入学という環境移行期において新しい環境にあった対人ネットワークを再構成することは、新しい環境での生活を適応的に過ごす上で重要であることを指摘している。また梅本（1992）は大学進学に見られる特有の環境変化の個人差に注目し、入学後早い時期に新しい人間関係は大学全般の印象や評価に関わりがあること、また自宅外の学生は入学後1人で暮らすことへの開放感があり、友人の獲得ができた者は大学生活により肯定的なイメージを持っていることを明らかにした。また友人関係と不適応の関係に注目した研究も存在する。青年期の中学・高校の女学生を対象とした調査では、希薄な友人関係は学校適応感に望ましくない影響を与えることを明らかにした（石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・守口,2009）。また橋本（2000）も大学生を対象とした調査から浅い関係を好み、気遣いをすることが精神的健康の低さや対人ストレスを高めることを明らかにした。すなわち、友人関係の不満足感や表面的で希薄な友人関係が形成されその状態が維持されることは、大学生活にとってマイナスの影響を与え、不適応をもたらすことが想定される。

さらに大学入学後に新たに形成される友人関係は、その以前に築いてきた友人関係の在り方を反映することが指摘されている。新しい友人関係がスタートする際に、先行する関係が消滅するわけではなく、同時進行的に関係が存在することも多く、互いの関係がどのように推移していくのかの検討も重要な視点である。したがって、大学入学時の友人形成の検討の際に古くからの友人（以下旧友人とする）と新しい友人（以下新友人とする）との関わりのありようを検討する必要性が指摘されてきた（中村・浦,2000；和田,2001）。和田（2001）による入学6ヶ月後に行った調査

の結果では、旧友人の方が新友人より親密であること、新友人に対しては身近な友人としての期待が現れること、また旧友人と新友人は相補的な機能を持っていることを明らかにした。また多川（2006）は女子短大生を対象とし、新旧友人との関わりを、大学入学年の5月時点と9月時点の2回の調査で検討している。その結果、夏休み直後の調査においても旧友人との行動的な親密度は高く、少なくとも入学後6ヶ月程度では、友人関係で旧友人との関係の影響が強いことがうかがえる結果を示した。適応感との関連ではPaul & Brier（2001）は大学入学後もなお旧友人を強く思う感情は大学入学後の孤独感を高めることを指摘しており、入学前に知り合った友人関係がどのように推移し、適応感にどのように影響していくのかを検討する視点が求められる。

## 【本研究の目的】

本研究の目的は、第1に大学4年間の追跡的調査から、大学入学後に出会った新友人について最も親しい友人が変化するのかその推移を検討することである。本研究では、大学4年間で6回の調査を実施し、調査ごとに最も親しい友人1名（新友人・旧友人各1名）について回答してもらった。第2に、大学4年間の友人関係の変化が大学適応感に及ぼす影響を検討することである。

## 研究1. 大学生活に関する適応感に関する項目の収集と尺度の作成

### 【目的】

適応という概念に対する定義は様々であり、多岐にわたる測定がなされてきた。本研究は、友人関係と大学適応との関連を明らかにする目的から、その適応感は、生活全般と

その主観的感情を幅広く捉えた概念が適切であると考えた。したがって、本研究では、東・浅川・古川・吉田（2002）の「大学適応感とは大学生の大学という環境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」の定義を採用する。研究1ではこの定義に当てはまる項目を、本邦の大学生生活の適応感を扱った先行研究から、幅広く収集することを第1の目的とする。東ら（2002）の定義は幅広く大学生生活全般を網羅したものと考えられるが、女子学生のみを検討であること、また本邦には、多数の大学適応感を測定する尺度が存在するが、東らの定義に当てはまり、かつ東らの尺度と重複しない内容の項目も存在することから、再構成を試みる。また項目の信頼性を確認した上で、精神的健康（GHQ；中川・大坊,1985）との関連から妥当性を確認する。さらに、研究1で作成する項目は後述する面接調査を終えた協力者に対する質問紙調査として使用する項目である。協力者の疲労度に配慮し、負担を軽減する観点から少ない項目で全般的な大学適応感を測定するために、大学生生活に関する適応感を表す集約した項目を選定することを第2の目的とする。

## 【方法】

### 1. 調査協力者

北海道内の大学生93名（男性23名・女性70名）に対し質問紙調査を行った。平均年齢は20.67歳（SD=1.72）であった。

### 2. 調査時期

2009年7月に質問紙調査を行った。

### 3. 質問紙の構成

1) 大学適応感に関する項目；本邦の先行研究を概観し、適応感を測定していると想定される7領域（1：対人関係満足感・2：学習関係・3：大学生活への不安度・4：大学生

活満足度・5：学校享受感・愛着感・6：居心地の良さ・7：抑うつ感）を選定した。選定方法は、因子負荷量の高い項目を最優先とし、著者と指導教員及び大学院生4名の合議によって、内容が重複しないように考慮した上で各領域から3項目ずつ、計21項目を採用した。採用した項目は1：対人関係満足感（東ら,2002；植村ら,2001）・2：学習関係（東ら,2002；大久保・青柳,2003）・3：大学生生活への不安度（藤井,1998）・4：大学生生活満足度（植村ら,2001；大久保ら,2003；坂田・佐久田・奥田・川上,2007）・5：学校享受感・愛着感（古市・玉木,1994；亀岡,2006）・6：居心地の良さ（大久保・青柳,2003；植村ら,2001）・7：抑うつ感（藤井,1998）の領域から上記の手続きにより各3項目計21項目を使用した。なお協力者には現在の気持ちについて回答してもらった。

2) GHQ28項目（4件法；中川・大坊,1985）；28項目版では4下位尺度（身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、鬱状態）について各7項目で構成されている。主として神経症者の症状把握、評価および発見に有効であるとされており、原版の教示に従い直近の2－3週間のことを考えて回答してもらった。

## 【結果】

### 1. 大学生活に関する適応感項目の因子構造の検討

大学生活に関する適応感21項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行い、固有値の減衰状況から4因子解を採用した。第1因子は、大学に対する享受感、満足度、居場所に関する項目が集約され、「大学生活に関する満足感」因子と命名した。第2因子は大学生活に関する抑うつ感や不安度に関する項目が集約され、「大学生活に関する抑うつ感」因子と命名した。第3因子は、学習関係の評価に関する項目が集約され「学習



に対する適応感」因子と命名した。第4因子は友人関係に関する項目が集約され、「対人関係の満足感」因子と命名した（Table1参照）。項目全体の信頼性係数（ $\alpha$ ）は $\alpha = .916$ であった。各因子での検討では、第3因子（ $\alpha = .670$ ）・第4因子（ $\alpha = .678$ ）では、項目数が少なく、信頼性係数はやや低い値となったものの、おおむね十分な信頼性を確保できた。

## 2. 大学生活に関する適応感項目とGHQとの関連

GHQ28項目については、中川・大坊（1985）の算出方法に従い、4件法のうち精神的不健康な方向を示す3及び4に記入があった場合、1点を付与した。したがって、最高点は28点となる。調査協力者の評定平均値は9.60（SD=6.04）点であった。

次に大学適応感と精神的健康（GHQ）得点のピアソンの積率相関係数を算出した。尚、適応感全21項目の評定平均値を算出する際には、項目NO3・7・10・14・17・21を逆転項目として処理した（Table1参照）。したがって、得点の高さは、全項目における適応感の高さを表す。その結果、全体の適応感とGHQには負の有意な相関（ $r = -.275$ ）がみられた（Table2参照）。各因子別の検討では、抑うつ感とGHQには正の有意な相関（ $r = .430$ ）がみられ、学習に関する満足感とGHQには負の有意な相関（ $r = -.259$ ）がみられた。

## 3. 大学適応感項目の選定

研究1の第2の目的は、調査協力者への回答の負担を考慮するために、21項目から、大学適応感を表す項目の集約を試みることであった。したがって、第1因子では因子負荷量の高い3項目を、第2・3・4因子では因子負荷量の最も高い各1項目を採用した。採用した6項目での一次元性を確認するために

主成分分析を行い、信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = .760$ であり、一次元で扱う信頼性は確保された（Table3参照）。また6項目の評定平均値を算出（「4. 大学にいる時はイライラしがちである」は逆転項目として処理）した上で、GHQ28項目とのピアソンの積率相関係数を算出したところ、有意な負の相関が得られた（ $r = -.247$ ）。また、大学適応感項目の全21項目版とのピアソンの積率相関係数を算出したところ、有意な正の相関が得られた（ $r = .948$ ）。

## 【考察】

研究1では、本邦で明らかにされてきた大学適応感を測定する項目を幅広く収集し、その構造を検討した上で、大学適応感を集約された項目を選定することが目的であった。先行研究で収集した項目を7領域での解釈を採用し、因子負荷量の高い順から3項目ずつ選定した。因子には友人関係に関する項目も含まれているが、本研究で明らかにされる大学生の友人関係との関連において、大学適応感の一領域である友人関係に対する評価を量的指標で測定することも必要であると考え採用した。因子構造を検討した結果、4因子構造が抽出された。第1因子の「大学生活に関する満足感」は、想定した7領域のうち、大学生活満足感、学校享受感・愛着感、居場所の3領域を中心とし、大学生活全般に関する満足度に関する10項目が集約された。第2因子の「大学生活に関する抑うつ感」は、藤井（1998）の大学生活不安尺度の項目が因子として抽出された。第3因子の「学習に対する適応感」は、学習関係の評価に関する3項目が集約され、第4因子の「対人関係の満足感」は本論文の目的でもある友人関係に対して大学生活の中で満足感や充実感を感じているかに関する項目が集約された。21項目の信頼性は、 $\alpha = .918$ であり十分な信頼性が確保され

たが、因子別の信頼性の検討では、第3・第4因子はやや低い値となった。この要因の一つとして、3項目ずつの少数の項目であったと考えられる。しかしながら、先行研究での領域と因子構造が一致していたことや因子構造の解釈可能性からも4因子構造が適当であると判断した。

次にGHQ28項目との関連を検討した。GHQの得点が高いことは、精神的不健康であることを示すことから、本節で使用した適応感項目との有意な負の関連 ( $r = -.275$ ) を確認することで基準関連妥当性が確保されたものと考えられる。しかしながら、全体としての相関は、弱いものであった。因子別の関連では、GHQと「大学生活における抑うつ感」

には正の中程度の関連が、またGHQと「学習に対する適応感」には負の弱い程度の関連が見られたが、「大学生活に関する満足感」・「対人関係の満足感」では関連が見られなかった。GHQは主に精神的健康のスクリーニングを目的として開発された尺度であり、ストレス強度の評価や神経症の発見に有効とされている (Goldberg & Hillier, 1979)。すなわち、本研究で採用した大学適応感項目には、心身の不調に直接関連する項目とその評価が主観的な心身の不調と関連が低い内容の両側面が含まれている結果であり、幅広く大学生活の適応感を測定していると考えられる。

第3に研究1の目的は、協力者の回答への負担を考慮し、かつ「大学生の大学という環

Table1. 大学生活適応感項目の因子構造

先行研究尺度領域名		1	2	3	4
居場所 享受・愛着 生活満足 生活満足 享受・愛着 享受・愛着 居場所 生活満足 学習関係 居場所	19.この大学は自分の居場所だと感じる	<b>.899</b>	.169	.075	-.056
	11.大学では楽しいことがたくさんある	<b>.856</b>	.006	.022	-.004
	13.大学での日々の生活は充実している	<b>.833</b>	-.143	.060	-.154
	6.良い大学生活が送れていると感じる	<b>.831</b>	-.099	-.119	.018
	18.この大学は自分の生きがいである	<b>.766</b>	.283	.218	-.101
	4.大学に行くのが好きだ	<b>.763</b>	-.194	-.160	.015
	5.大学の中では周囲に溶け込めている	<b>.635</b>	.018	-.171	.256
	20.大学で自分は成長できている	<b>.573</b>	-.054	.253	.037
抑うつ感 抑うつ感 不安度 抑うつ感 不安度	9.この大学に入学して良かったと感じる	<b>.529</b>	.012	.269	.176
	12.大学の中ではリラックスできている	<b>.525</b>	-.338	-.313	.019
	14.大学にいる時は、イライラしがちだ	.093	<b>.829</b>	.058	-.133
	7.大学にいる時は、寂しくなる	-.050	<b>.655</b>	-.118	.119
	10.この大学にしていると何か不安な気持ちになる	-.022	<b>.644</b>	-.145	.102
学習関係 不安度 学習関係	21.大学にいる時は、ゆううつになりがちだ	.011	<b>.633</b>	-.196	-.070
	3.この大学にしていると、自分がダメになるのではないかと感じる	-.090	<b>.421</b>	-.354	.075
	2.大学では将来役に立つことが学べている	-.025	-.103	<b>.820</b>	.041
	17.できることなら、転学部(転学科)したくて仕方がない	.127	.341	<b>-.461</b>	.029
対人関係 対人関係 対人関係	16.大学での勉強が楽しい	.038	-.069	<b>.451</b>	.159
	15.大学の中に何でも話せる友人がいる	-.009	-.016	-.017	<b>.716</b>
	8.大学の友人と勉強以外の個人的な付き合いがある	-.079	.010	.081	<b>.620</b>
	1.大学に入学して良い友人に出会えたと感じる	.165	.063	.168	<b>.593</b>
$\alpha$		.928	.834	.670	.678
因子間相関		I	II	III	IV
		II	-.502		
		III	.453	-.361	
		IV	.496	-.104	.226

境が心理的調和にあって大学からの要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、ともに実現される均衡状態」の大学適応感の定義に当てはまる最適の項目を選定することであった。因子構造の結果と先行研究で明らかにされている領域との関連を考慮し、第1因子の因子負荷量の高い上位3項目と第2～4因子の最上位項目を採用した。採用した6項目の第1主成分の重みを確認し、信頼性 ( $\alpha = .760$ ) も確保できたことから、6項目の集約を達成した。

## 研究2. 大学4年間の友人選択の推移と友人関係が大学適応感に及ぼす影響

### 【目的】

研究2では、第1に6回の調査で協力者に記入または面接調査で選択してもらった最も親しい新友人の選択についてその推移を明らかにすることを目的とする。

第2に、友人選択状況が研究1で作成した大学生活の適応感に関する項目に及ぼす影響を検討することを目的とする。

### 【方法】

#### (1) 第1回目～5回目調査の質問紙調査

##### 1. 調査協力者

第1回目調査時点において北海道内の大学1年生を対象とし、質問紙調査を行った。5回の調査全てに参加した協力者は、115名（男性29名・女性86名）であったが、本研究では後述する第6回目調査を含めてすべての調査に参加し、第6回目調査時点において各調査で回答してもらった友人のイニシャルを正確に記憶していた53名のデータを分析対象とした。なお、研究1と研究2の2つの調査に重複して参加した協力者はいない。

##### 2. 調査時期

1回目調査の実施は2006年4月下旬であり、以下2回目は2006年6月上旬、3回目は2006年7月上旬、4回目は2006年11月上旬、5回目は2007年5月中旬に調査を実施した。調査回数は全5回であった。

##### 3. 質問紙の構成

1) 基本的属性；性・年齢を回答してもらい、居住状況について「1. 親と同居」「2. 一人暮らし」「3. 兄弟・親戚と同居」「4. その他」の中からあてはまるものを選択してもらった。2) 同性友人のイニシャルの記入：①「新友人」：大学に入学してから

Table2. 大学適応感項目と精神的健康 (GHQ) との関連

	全項目	第1因子 生活	第2因子 抑うつ感	第3因子 学習	第4因子 対人関係
GHQ	-.275*	-.151	.430**	-.259*	-.033
			$p^{**}<.01$		$p^{*}<.05$

Table3. 大学適応感6項目による主成分分析の結果

	第1主成分
1. この大学は、自分の居場所だと感じている	.823
2. 大学では、楽しいことがたくさんある	.858
3. 大学での日々の生活は、充実している	.887
4. 大学にいる時は、イライラしがちである	-.484
5. 大学では、将来役に立つことが学べている	.621
6. 大学の中に何でも話せる友人がいる	.344
累積説明率	48.95%
$\alpha$	.760
平均値	4.74
(SD)	(1.01)



知り合った人で最も親しい同性友人を、②「旧友人」：大学に入学する前に知り合った人で最も親しい同性友人を想起するように教示した上で、それぞれのイニシャルを記入してもらった。なお、各調査時点で対象友人を固定せず、各測定時点で新旧の最も親しい友人を選択させた。3) 関係の親密さ：山中（1994）の①好意度②関係関与度③関係のラベリングの3項目。4) 友人との関係性、5) 対人感情：津村・大坊・林・今川（1985）の対人感情項目18項目のうち16項目、6) 二者関係認知：林・今川・津村・大坊（1984）の二者関係認知項目30項目のうち14項目、7) 対人行動：今川・津村・大坊・林（1984）の対人行動55項目のうち24項目を使用した。なお、3)～7)については、本研究では使用しないため詳細を割愛する。

## (2) 第6回目調査の面接および質問紙調査

### 1. 調査協力者

北海道内の大学生104名（男性31名・女性73名）の大学4年生であった。本研究では前述の第1回目～5回目調査の質問紙調査にすべて参加した53名（男性14名・女性39名）のデータを分析対象とした。第6回目調査時点での平均年齢は21.66歳（SD=.59）であった。

### 2. 調査時期

2009年7月～2009年11月に個人面接で行い、面接調査後質問紙調査にも回答してもらった。

### 3. 面接調査の概要

面接内容は協力者の許可を得て録音した。面接の内容については、個人情報に関する公表は行わないこと、調査分析終了後は、面接の録音を消去することを書面にて約束し、協力者全員から了承を得た。面接調査では、協力者にとって最も親しい友人を一人想起してもらい、その友人との出会いから、現在の関係までを時間の経過に従い回想してもらった。その際、協力者と選択友人を含めた共通

の友人関係が確認された場合には、複数の関係を含めた友人関係を回想してもらった。協力者にとって最も親しい友人が、大学入学後に知り合った新友人の場合には、面接調査を終了したが、協力者が、大学入学前に知り合った旧友人を選択した場合には、旧友人の回想終了後、再度最も親しい新友人1名を選択してもらい回想してもらった。大学生の友人関係の親密化過程を抽出した面接内容については本研究では使用しないため、詳細を割愛する。面接における平均録音時間は40分06秒であり、逐語録は著者が面接終了後に起こした。親密化過程に関する面接調査終了後に、前述の第1回目～5回目の質問紙調査で記入した友人のイニシャル及び、第6回目調査で選択した友人について、同じ友人を想定したのかについて確認を行った。調査期間中に最も親しい友人が変化していた場合には、協力者が回答可能な範囲で、どのような友人を選択したのかについて回答を求めた。

### 4. 質問紙の構成

面接調査終了後、「面接調査時」、「入学当時」、「大学生活において辛かった時期」<sup>2)</sup>、「大学生活において充実していた時期」<sup>2)</sup>の4時点について前述の研究1で選定した大学適応感の6項目にどれくらいそのような気持ちを感じていたのかを7件法で回答してもらった。「面接調査時」については質問項目を現在形の表現に、その他の3時点については回想してもらった時点に関する適応感を測定する目的であることから過去形の表現に統一した。

## 【結果】

### (1) 大学4年間の友人選択の推移

各調査時点間（1～2回目・2～3回目・3～4回目・4～5回目・5～6回目）で最も親しい友人選択について同じ友人を選択したのか、友人を変更したのかの友人選択状況をTable4に示した。1～2回目調査時点（大

学入学後3週間～2ヶ月後)で同じ友人を選択した率は60.4%( $n=32$ )であり、2～3回目(大学入学後2ヶ月～3ヶ月後)では、77.4%( $n=41$ )、3～4回目(大学入学後3ヶ月～7ヶ月後)では75.5%( $n=40$ )と同友人を選択する確率が高まっていた。しかし、2年生の進級時である4～5回目(大学入学後7ヶ月～1年1ヶ月後)の同友人選択率は66.0%( $n=35$ )、5～6回目(大学入学1年1ヶ月～3年以降後)では、37.7%( $n=20$ )であり、進級時や大学生活の後半にも大学生にとっての最も親しい友人は変化することを示した。

次に、調査時点間5回中に何回友人選択が変更したのかを検討した。はじめに5回の選択パターンを全協力者について検討し、その後変更回数別に一覧表に示した(Table5参照)。その結果、6回の調査期間中毎回の調査で一貫して同じ友人を選択した協力者は53名中7名のみであり、その他46名の協力者は大学4年間で少なくとも、1回以上友人選択を変更していた。友人選択パターンの中で最も人数が多いのは、1回目～5回目の調査では、同じ友人を選択し5～6回目(大学3年目以降)に友人を変更した協力者が10名だった。続いて、一貫して同じ友人を選択した協力者が7名、1回目～4回目の調査では、同じ友人を選択し4～5回目および5～6回目に2回友人を変更した協力者が7名だった。なお、全調査時点間で毎回最も親しい友人を変更していた協力者は1名だった。

## (2) 大学生の友人関係が大学適応感に及ぼす影響

第1に研究1で選定した大学生生活の適応感6項目について現在(6回目調査時点)の適応感得点および6回目調査時点時に回想してもらった入学当時・大学生活で最も辛かった時期・大学生活で最も充実していた時期の適応感得点の4時点別に評定平均値を算出し、以下の分析で使用するものとした。時点が被験者内要因の独立変数、各時点の適応感得点を従属変数とする1要因の分散分析を行ったところ、時点の主効果が有意であった( $F(3, 156) = 62.82, p < .001$ )。Bonferroniの多重比較を行ったところ、最も充実していた時期の適応感(5.79点)は、現在(5.61点)・入学当時(4.35点)・最も辛かった時期(4.00点)の全ての調査時点よりも高かった。また現在の適応感得点は入学当時・最も辛かった時期よりも高かった。

第2に大学生の友人関係が大学適応感へ与える影響を検討するために、「性」・「現在の居住形態」・「6回目調査時点で最も親しい友人として新友人または旧友人を選択した状況」・「友人選択状況(1～2回目・2～3回目・3～4回目・4～5回目・5～6回目)」・「新友人の友人選択の変更回数」を説明変数、「6回目調査時点の適応感」・「入学当時に回想してもらった適応感」・「大学生活で最もつらかった時期を回想してもらった適応感」・「大学生活で最も充実していた時期を回想し

てもらった適応感」得点を基準変数とする数量化I類を行った(Table6参照)。

説明変数の居住形態は、「親と同居( $n=37$ )」・「一人暮らし・兄弟親戚と同居・その他( $n=16$ )」の2カテゴリー、各調査時点間の友人選択状況は「同じ友人を選択した」・「違う友人を選択した」の2カテ

Table4. 調査時点間の友人選択状況 (上段=人数・下段=%)

	友人選択状況				
	1～2回目	2～3回目	3～4回目	4～5回目	5～6回目
同じ友人を選択した	32 (60.4)	41 (77.4)	40 (75.5)	35 (66.0)	20 (37.7)
違う友人を選択した	21 (39.6)	12 (22.6)	13 (24.5)	18 (34.0)	33 (62.3)

ゴリーであった。また6回目の面接調査時点では、面接調査時に初めに協力者にとって最も親しい友人1名を選択してもらったが、その友人が「大学入学前に知り合った友人(旧友人；n=18)」・「大学入学後に知り合った友人(新友人；n=35)」であるかの2カテゴリーとした。さらに友人選択変更回数については、「一度も友人を変更しなかった(0回)群(n=7)」、「1回変更した群(n=16)」、「2回変更した群(n=15名)」・さらに4回変更した協力者4名、5回変更した協力者1名と人数が少なかったため、「3回以上の変更群(n=15)」として統合し、4カテゴリーとした。

面接調査時(6回目調査時点)の適応感では、1-2回目の調査時点間の友人選択状況(偏相関=.23)の影響が大きくなっている。同じ友人を選択した群の重み数量が負の値に、友人選択を変更した群が正の値になっていた。次いで友人選択回数(21)の影響が大きくなっている。1回も友人を変更しなかった群の重み数量が一番大きい負の値に、1回変更した群が一番大きい正の値になっていた。さらに性(20)の影響が大きく、男性の重み数量が負の値に、女性が正の値になっていた。面接調査時点の適応感得点には1-2回目の友人選択、友人選択回数、性が影響を与えていた。

入学当時を回想してもらった時点の適応感では、居住状況(33)の影響が大きくなっている。親と同居群の重み数量が負の値に、一人暮らし群が正の値になっていた。次いで第6回目調査時点で最も親

しい友人(新友人または旧友人)の選択(27)の影響が大きくなっている。旧友人選択群の重み数量が負の値に、新友人選択群が正の値になっていた。また性(26)の影響が大きく、男性の重み数量が負の値に、女性が正の値になっていた。さらに友人選択回数の(25)の影響が大きくなっている。1回も友人を変更しなかった群の重み数量が一番大きい負の値に、3回以上変更した群が一番大きい正の値になっていた。入学当時を回想してもらった適応感得点には居住状況、新旧友人の選択、友人選択回数、性が影響を与えていた。

最も辛かった時点での適応感では、1-2回目の調査時点間の友人選択状況(30)の影響が大きくなっている。同じ友人を選択し

Table5. 変化回数別6回の調査における友人選択のパターン一覧

友人が変化 した回数	友人選択状況					人数
	1-2回目	2-3回目	3-4回目	4-5回目	5-6回目	
0回	同	同	同	同	同	7
1回	同	同	同	同	変化	10
	変化	同	同	同	同	5
	同	変化	同	同	同	1
2回	同	同	同	変化	変化	7
	変化	同	同	同	変化	4
	同	同	変化	同	変化	2
	同	変化	同	同	変化	1
	変化	同	同	変化	同	1
3回	変化	変化	同	同	変化	3
	変化	同	変化	変化	同	2
	同	同	変化	変化	変化	1
	同	変化	変化	同	変化	1
	同	変化	変化	変化	同	1
	変化	変化	変化	同じ	同	1
	変化	変化	同	変化	同	1
4回	変化	同	変化	変化	変化	2
	同	変化	変化	変化	変化	1
	変化	変化	変化	変化	同	1
5回	変化	変化	変化	変化	変化	1

「同」は調査時点間で同じ友人を選択したことを示す

「変化」は調査時点間で最も親しい友人を変更したことを示す

た群の重み数量が負の値に、友人選択を変更した群が正の値になっていた。最も辛かった時期の適応感得点には1－2回名の友人選択が影響を与えていた。

最も充実していた時点での適応感では、性(29)の影響が大きく、男性の重み数量が負

の値に、女性が正の値になっていた。次いで友人選択回数(22)の影響が大きくなっている。2回友人を変更した群の重み数量が一番大きい負の値に、3回以上変更した群が一番大きい正の値になっていた。さらに第6回目調査時点で一番親しい友人(新友人または

Table6. 大学生の友人選択状況が大学適応感に及ぼす影響

		現在(大学4年時:第6回目調査時点)の適応感得点			回想による入学時の適応感得点			回想による最も辛かった時期の適応感得点			回想による最も充実していた時期の適応感得点		
		平均値 (SD)	数量	偏相関	平均値 (SD)	数量	偏相関	平均値 (SD)	数量	偏相関	平均値 (SD)	数量	偏相関
性	男性	5.51 (.63)	-.23	<b>.20</b>	4.20 (.94)	-.45	<b>.26</b>	4.58 (.69)	.03	<b>.02</b>	5.65 (.68)	-.30	<b>.29</b>
	女性	5.64 (.75)	.08		4.4 (1.15)	.16		4.34 (1.04)	-.00		5.83 (.58)	.11	
居住状況	親と同居	5.62 (.78)	.01	<b>.03</b>	4.18 (1.13)	-.24	<b>.33</b>	4.45 (1.06)	.04	<b>.07</b>	5.77 (.62)	-.00	<b>.07</b>
	一人暮らし・兄弟・ 親戚との同居	5.57 (.56)	-.02		4.72 (.93)	.55		4.28 (.71)	-.10		5.80 (.53)	.06	
第6回目調査時点における新旧友人の選択	新友人を選択	5.69 (.78)	.07	<b>.16</b>	4.50 (1.02)	.19	<b>.27</b>	4.51 (.95)	.09	<b>.14</b>	5.84 (.62)	.08	<b>.20</b>
	旧友人を選択	5.45 (.54)	-.15		4.06 (1.21)	-.37		4.18 (.97)	-.17		5.67 (.59)	-.16	
1－2回目の新友人の選択	同じ友人を選択	5.51 (.73)	-.13	<b>.23</b>	4.26 (1.25)	.04	<b>.04</b>	4.09 (.90)	-.40	<b>.30</b>	5.69 (.61)	-.09	<b>.17</b>
	違う友人を選択	5.76 (.68)	.20		4.48 (.80)	-.07		4.87 (.87)	.60		5.94 (.57)	.14	
2－3回目の新友人の選択	同じ友人を選択	5.63 (.78)	.06	<b>.17</b>	4.26 (1.19)	-.02	<b>.03</b>	4.41 (1.00)	.03	<b>.03</b>	5.79 (.63)	.07	<b>.17</b>
	違う友人を選択	5.53 (.46)	-.23		4.64 (.68)	.07		4.38 (.86)	-.10		5.78 (.54)	-.25	
3－4回目の新友人の選択	同じ友人を選択	5.53 (.73)	-.07	<b>.16</b>	4.25 (1.20)	.07	<b>.11</b>	4.35 (.92)	-.05	<b>.07</b>	5.76 (.61)	.06	<b>.13</b>
	違う友人を選択	5.83 (.63)	.22		4.65 (.65)	-.22		4.55 (1.09)	.18		5.87 (.60)	-.18	
4－5回目の新友人の選択	同じ友人を選択	5.56 (.77)	-.04	<b>.08</b>	4.22 (1.12)	-.00	<b>.00</b>	4.37 (.95)	-.03	<b>.04</b>	5.74 (.64)	-.03	<b>.08</b>
	違う友人を選択	5.69 (.61)	.09		4.59 (1.04)	.00		4.45 (1.00)	.07		5.87 (.54)	.07	
5－6回目の新友人の選択	同じ友人を選択	5.48 (.76)	-.15	<b>.18</b>	4.23 (1.18)	.26	<b>.13</b>	4.28 (.88)	-.34	<b>.16</b>	5.76 (.65)	-.04	<b>.06</b>
	違う友人を選択	5.69 (.68)	.09		4.41 (1.05)	-.16		4.48 (1.01)	.20		5.80 (.59)	.02	
新友人選択の変更回数	0回(変更なし)	5.14 (.99)	-.17	<b>.21</b>	3.61 (1.54)	-1.29	<b>.25</b>	3.85 (.97)	.27	<b>.05</b>	5.64 (.83)	-.18	<b>.22</b>
	1回	5.71 (.62)	.19		4.34 (1.13)	-.09		4.37 (.80)	.11		5.77 (.60)	-.07	
	2回	5.59 (.78)	-.14		4.41 (1.16)	.10		4.47 (1.09)	-.03		5.72 (.56)	-.21	
	3回以上	5.73 (.56)	.02		4.62 (.63)	.60		4.61 (.97)	-.21		5.93 (.57)	.38	
重相関係数			<b>.44</b>			<b>.51</b>			<b>.49</b>			<b>.41</b>	



旧友人)の選択(20)の影響が大きくなっている。旧友人選択群の重み数量が負の値に、新友人選択群が正の値になっていた。最も充実していた時点での適応感得点には性、友人選択回数、新旧友人の選択が影響を与えていた。

## 【考察】

### (1) 大学4年間の最も親しい友人選択の推移

本研究では、大学4年間にわたる追跡的調査で、最も親しい大学入学後に知り合った新友人が変化するかを協力者に毎回の調査で友人選択をしてもらうことにより検討した。その結果、6回の調査期間中、一度も友人選択を変更しなかった協力者は約13%程度であり、約87%の協力者が少なくとも1回以上親しい友人の選択を変更していた。さらに調査期間中2回以上友人選択を変更した協力者が約56%であった。松田(2000)の指摘通り、複数の友人の中から最も親しい友人を選択している状況が大学生活全般で生じることを友人のイニシャルを4年間の追跡する調査で明らかにした。特に大学2年～大学4年時(5～6回目)の調査時点間では、友人を変更した協力者が62.3%であり、大学生活の後半において、最も親しい友人を変更し、複数の友人関係の中から友人を選択している状況が明らかになった。本研究の協力者が所属する学部では、資格取得の志向により授業選択のパターンは大きく異なり、3年・4年時には実習を経験する協力者も多い。またサークル活動やアルバイト経験等で学年が上がるにつれて幅広い対人関係を経験していることが渡辺(2011)の面接調査の発話から明らかになっている。友人選択パターンでも、大学2年時の進級時や大学4年時の最終調査時点で友人を変更した協力者が多いことも確認されたことから幅広い対人関係経験から友人が選択されている可能性があり、大学生の友人関係が

大学生生活に密接に関わっていること、さらに4年間の追跡する意義を提供することができた。複数の友人関係を研究対象とすることは、データ収集の煩雑さがあり追跡することの難しさもあるが、本研究では、5回の質問紙調査と1回の面接調査を組み合わせることで、協力者が記入したイニシャルを確認でき、4年間の追跡を可能にしたことに本研究の意義があると考ええる。

### (2) 大学生の友人関係の推移が大学生生活の適応感に及ぼす影響

大学生の友人選択状況が大学生生活の適応感に及ぼす影響を検討するために、友人選択状況に加えて性、居住状況、新旧友人の選択、友人選択の変更回数の指標も加えて分析を行った。

第1に、友人選択状況以外の指標のうち性は大学4年時の面接調査時点での適応感と入学当時と最も充実していた時期を回想してもらった時の適応感に影響を与えており、いずれも女性が適応感の高さに寄与していた。また居住状況は、入学当手を回想してもらった時の適応感に影響を与えており、一人暮らし群を中心とした親と同居していない群が適応感の高さに寄与していた。大学進学時に親元を離れて新生活をスタートさせた協力者は生活環境も大きく変化しており、その変化が新たに始まった大学生活への満足感や充実感を高めた可能性がある。

第2に友人選択状況が各時点の大学適応感に及ぼす影響では、全体的傾向として、1～2回目の友人選択状況以外の調査時点間では適応感への影響は確認されなかった。1～2回目の友人選択状況については、大学4年時の面接調査時点での適応感と最も辛い時期を回想してもらった時の適応感に影響を与えており、いずれも友人選択を変更していた群が適応感の高さに寄与していた。友人選択を変更したことの要因は様々であるが、入学当初



から友人選択を変更したことは、入学当初にできた友人よりも親しい友人が出現した状況や複数友人関係の中で友人を選択可能であったと考えられる。その初期段階の変更が、後々の大学生活への適応感を高めることや大学生にとって辛かった時期でも適応感を高められる可能性を示唆した結果である。また新友人選択の変更回数は、大学4年時の面接調査時点での適応感、入学当時および最も充実していた時期を回想してもらった時の適応感に影響を与えており、一貫した傾向として、一度も友人を変更しなかった群が適応感の低さに寄与していた。一方で3回以上友人を変更した群は、入学当時と最も充実していた時期を回想してもらった適応感の高さに寄与しており、同じ友人を選択し続ける状況よりも最も親しい友人が変更される状況が、大学生活への満足感や充実感につながる可能性がある。

第3に大学4年時の面接調査時点での新旧友人選択については、入学当時と最も充実していた時期を回想してもらった時の適応感に影響を与えており、新友人を選択した群が適応感の高さに寄与していた。本研究では大学4年時の選択であるが、渡辺（2011）では、入学当初から5回の継続調査で新旧友人の親密さの程度を比較し、旧友人の親密度得点が高いことを確認している。またPaul & Brier（2001）は旧友人を強く思う感情は大学入学後の孤独感を高めることを指摘したが、本研究では大学卒業直前においてもなお旧友人が新友人よりも親しい友人として選択されることが回想してもらった入学当初や充実していた時期の適応感を高めないことが確認された。すなわち、大学に入学し新たに形成される友人関係が大学生にとって旧友人よりも親しいと感じられる存在となることは、大学生生活の満足感や充実感につながることを本研究から明らかとなり、大学生にとっての友人関係と適応感の関連を確認した。

## 【今後の課題】

本研究では、大学4年間の追跡的研究から大学生にとって最も親しい友人選択を明らかにし、適応感との関連を明らかにした。大学生にとって入学してから知り合った友人関係は大学生活後半に至るまで変化していく様相とその関係が適応感の指標にも影響することを明らかにできたことに本研究の意義が存在する。しかしながら課題もある。各時点で友人の選択を求める手続きにより、調査協力者が友人選択を変更した場合の友人関係が追跡できた一方で、初期に選択した友人との関係を協力者全員について追跡することが不可能となった。そこで今後の課題として、初期に選択した人物と新たに選択した友人の両名の追跡的調査を行う必要がある。また適応感との関連については、第6回目調査時点で入学当時や大学生活を回想してもらった上での適応感である。今後は友人関係の様相と適応感を同時に追跡する調査を実施する必要がある。

## 【付記】

本研究は2007年度北星学園大学大学院社会福祉学研究科修士論文および2011年度に提出した同大学院博士論文（北星学園大学第四号；社会福祉学）を再分析、加筆、修正を加えたものです。本研究をまとめるにあたり、熱心なご指導・多くのご助言をいただきました今川民雄先生に厚く感謝申し上げます。また、大学4年間の6回の膨大な調査に参加して下さった学生の皆様には多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 安藤直樹・廣岡秀一・小川一美・坂本剛・吉田俊和 (2001). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (3) 大学生の職業観に関する4年間の追跡調査 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 48, 45-54.
- 東紀美子・浅川潔司・古川雅文・吉田幸世 (2002). 女子青年の大学適応に関する研究 神戸女子大学文学部紀要, 35, 161-179.
- Berg, J.H. (1984). Development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 346-356.
- Berg, J.H., & Clark, M.S. (1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: gradually evolving or quickly apparent? In V.J. Derlega & B.A. Winstead (Eds) *Friendship and social interaction*, New York: Springer-Verlag, pp101-128.
- 藤井義久 (1998). 大学生活不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- Goldberg, D.P. & Hillier, V.F. (1979). A scaled version of the General Health Questionnaire *Psychological Medicine*, pp139-145 (中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社)
- 橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 林文俊・今川民雄・津村俊充・大坊郁夫 (1984). 対人的オリエンテーションの研究 (2) 二者関係認知の構造について 日本心理学会第48回大会発表論文集, 662.
- Hays, R.B. (1984). The development and maintenance of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 75-98.
- Hays, R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 909-924.
- 今川民雄・津村俊充・大坊郁夫・林文俊 (1984). 対人的オリエンテーションの研究 (3) 対人行動の構造について 日本心理学会第48回大会発表論文集, 663.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日湯淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 125-133.
- 亀岡聖朗 (2006). 新大学への環境移行に関する心理学的研究 環境認知と愛着感の大学への適応との関連から 桐生短期大学紀要, 17, 151-158.
- 神山政仁・清水安夫 (2005). 大学生の友人イメージに関する研究 友人イメージ法と大学適応感尺度との関連性 学校メンタルヘルス, 8, 133-143.
- 小嶋明子 (1998). 高校から大学へ 会沢勲・石川悦子・小嶋明子 (編著) 移行期の心理学ーこころと社会のライフイベントー プレーン出版 pp115-146.
- 松田美佐 (2000). 若者の友人関係と携帯電話利用 関係希薄論から選択的関係論へ 社会情報学研究, 4, 111-122.
- 松井豊 (2005). 親密化過程 中島義明・繁枘算男・箱田祐司 (編) 新・心理学の基礎知識 有斐閣ブックス pp372-373.
- 南博文・山口修司 (1992). 大学生活への移行 山本多喜司・S. ワップナー (編著) 人生移行の発達心理学 北大路書房 pp179-204.
- 宮下一博, 1995, 講座生涯発達心理学第4巻自己への問い直しー青年期, 第6章青年期の同世代関係, 金子書房, 155-165
- 内藤伊都子 (2007). 大学生の友人関係 親密度による検討 日本大学国際関係研究, 28, 89-106.
- 中村雅彦 (1989). 大学生の友人関係の発展過程に関する研究 (I) 関係性の初期差異化現象に関する検討 日本グループダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 65-66.
- 中村佳子・浦光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について 対人関係の継続性の視点から 社会心理学研究, 15, 151-163.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010). 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9, 1-14.
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度作成の試み 個人ー環境の適合性の視点から パーソナリティ研究, 1, 38-39.

- Paul, E.L., & Brier, S. (2001). Friendsickness in the transition to college *Journal of Counseling and Development*, 79, 77-89.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2007). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 45-54.
- 多川則子・吉田俊和 (2002). 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響 青年期の恋愛関係と友人関係 対人社会心理学研究, 2, 65-73.
- 多川則子 (2006). 友人関係に対する行動的な親密度と役割行動期待遂行の影響 日本社会心理学会第47回大会論文集, pp696-697.
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 対人行動学研究シリーズ3 親密な対人関係の科学 誠信書房 pp89-116.
- 津村俊充・大坊郁夫・林文俊・今川民雄 (1985). 対人的オリエンテーションの研究 (8) Significant othersに対する関係認知を対人感情の対応関係について 日本心理学会第49回大会発表論文集, 272.
- 植村善太郎・小川一美・吉田敏和 (2001). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (2) 大学生の学習への取り組み、および大学生活満足感に関連する要因の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 48, 29-43.
- 梅本信章 (1992). 大学新入生の適応について 自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連 盛岡大学紀要, 11, 27-38.
- 和田実 (1993). 同性友人関係 その性および性別役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 和田実 (2001). 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72, 186-194.
- 渡辺舞 (2007). 大学への進学が友人関係の在り方にどのような変化を与えるか？ 高校3年生と大学1年生の比較から 北星学園大学大学院論集, 10, 89-103.
- 渡辺舞 (2011). 大学生の友人関係における親密過程と大学生活の適応感に関する研究 大学4年間における追跡的研究と回想的調査面接による検討 北星学園大学大学院博士論文 (未公開).
- 渡辺舞・今川民雄 (2011). 大学新入生の友人選択状況が親密化過程に及ぼす影響 社会心理

学研究, 27, 31-40.

山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.

吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 75-98.

吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.

## 註)

1) 渡辺・今川 (2011) は、2006年4月～7月に、304名の調査協力者に対し、3回の追跡調査を行った。本論文の調査協力者は、渡辺・今川 (2011) の調査およびその後の継続調査 (渡辺, 2011) にも参加したデータの一部である。

2) 「大学生活において辛かった時期」および、「大学生活において充実していた時期」の適応感項目の測定では、その時期を具体的に回答してもらった。「大学生活において辛かった時期」が1年生の時であると回答した協力者が10名 (18.9%)、2年生の時が25名 (47.2%)、3年生の時が15名 (28.3%) 4年生の時が3名 (5.7%) であった。また「大学生活において充実していた時期」が1年生の時であると回答した協力者が9名 (17.0%)、2年生の時が16名 (30.1%)、3年生の時が20名 (37.7%) 4年生の時が3名 (15.1%) であった。

